

シルバー・ワンダラーの雲ノ平紀行

室岡義勝（広大マスタース会員）

「富士山に登らぬ馬鹿、二度登る登る馬鹿」という戯れ諺があるそうです。これは、「雲ノ平に80才前後に二度登った馬鹿」の記録である。

今年（2022年）の春、ワンダーフォーゲル部（ワングル）後輩の宮原君から「雲ノ平に又行く気はないでしょうか」と誘われたのがきっかけである。昨年、彼とHさんと行く計画を立てたが、二人とも手術が入ってキャンセルのくやしい思いをされた由。幾つかの基礎疾患を抱えた僕が一人でも行こうとしたら、「単独行はダメ」と、家内がついてきてくれた。ところが家内の方が健脚で、「ちょっと待ってくれ」連発の情けない話。いろいろな理由から、8月下旬、新穂高温泉から双六一三俣蓮華—雲ノ平へと往復するコースになった。毎日コースタイムの1.5倍かかったが、念願の雲ノ平往復を5日間で成し遂げた。今回行くなら、雪渓が残る、花の季節の7月下旬で、富山県の有峰ダム湖東岸の折立から入り、裏銀座縦走路を逆にたどり、祖父—水晶—野口五郎—烏帽子岳からブナ立て尾根を下り高瀬ダムに降り立ち長野県の信濃大町にたどり着くコースを計画した。表銀座、裏銀座縦走路とは、東京・大阪から金曜日の夜行列車で信濃大町に着いて、槍ヶ岳めざして北アルプス縦走して、月曜日朝出勤という、昭和30、40年代の人気縦走路のこと。

4月26日、雲ノ平山荘予約受付開始。最近ではコロナ感染対策として山小屋も宿泊人数を絞り予約が必要となった。すぐに電話して、7月27日に取りあえず4人分確保。それから前後の山小屋予約。その後、かつての仲間を勧誘するが体力を理由に断られる。皆さん見識があったね。単独で念願の雲ノ平を計画していた横浜の乗本君が参加してくれることに。ダメ元で奈良の谷本君を誘ったところ、「82才、最後に這ってでも行きたい」と快諾。まさか這うことも無いだろう。でも、そうなったんです。宮原、乗本君は谷本君と僕が3年生の時の新入部員。この3君は、大学時代の黄金コンビ。僕を入れて(?)黄金4勇士になるはずだった。僕の心臓と腎臓は一部機能していない。M君は心臓と体幹に問題あり。T君は富みに筋肉低下の悩み有り。完全体はN君のみ。頭の方は今のところ皆問題ないようだ。僕は3週間前に4回目の新型コロナワクチンを打ったので万全だ。

戻り梅雨が明けて、高気圧が張り出してきたが、ロシアや北朝鮮の低気圧に負けてしぼんでしまった。週間予報見ては一喜一憂の毎日。富山地方鉄道で待ち合わせ、立山温泉に25日の宿を取る。この宿のご主人は、脱サラで立山スキー場にペンションを営みながら毎日絵を描いている悠々自適の人。ペンションはすてきな油絵で飾られていた。中央画壇でも有名な画伯らしい。明日からの健闘を祈って生ビールと地酒『立山』で乾杯。明日は晴れ予報で幸先が明るい。

7月26日 6時半、有峰口からタクシーで長い長い有料トンネルを抜けて、有峰ダム湖の上の折立登山口に。有峰ダムは、イタイイタイ病で有名になった神通川の上流。鉦山跡の神尾カンデンもこの近く。沢山の車が登山口駐車場からあふれている。薬師岳が最近の人気スポットらしい。折立から薬師岳鞍部の太郎平小屋まで標高差1043mの登り。ヤマケイのコースタイムでは3時間50分。M君のシルバー用補正計算では、想定時間約6時間。4人の黄金勇士はそれぞれ山歴60年のベテランぞろい。そこで、毎日リーダを変えて、任すことになった。今日のリーダはM君。

最初の三角点まで標高差 500mの急なシラビソの森の登りが続く。径は良く整備されている。ま一言ってみれば宮島の弥山までの登り。でも、10k gの荷物を背負っている。さらに山小屋まで水場がないので、2リットルの水を背負った。時折、森の切れ目から有峰ダムが眼下に見える。突然開けた場所に出た。三角点だ。青空の下、懐かしい夏山が広がっている。薬師岳の頂上付近はガスがかかっているが、その動きは速い。すれ違う登山客と「晴れましたね」と挨拶。テントを背負った単独行の若い女性も多い。行動中はマスクを外す。換気の効いた山中だもん。

ここからまだ標高差 500mの緩い登りが続く。小石で埋められた階段状の径が整備されている。展望の良く広く広い草原には、コバイケイソウ、イワイチゲ、ニッコウキスゲの群落が続く。緩い登りと言っても、結構きついよ。登れど登れど、五光岩ベンチに着かない。T君かなり遅れて、後ろから「おーい休もう」と、安心させてくれる。かつて、「ワングルに谷本有り」とならしたT君。

やっと、太郎平小屋が見えてきた。径の両脇に白い可憐なチングルマの群落、コバイケイソウの群れが儀礼兵よろしく迎えてくれる。広い丘陵に立つ大きな山小屋前には高山植物が咲き乱れている。風が冷たいので山小屋に転がり込んだ。3時過ぎ着。8時間かかった。コースタイムの2倍だ。かつては、30k gのキスリングを背負って、コースタイムの3分の2ぐらいで登っていたのに。でもこれであと3日間歩けそうな気がしてきた。

山小屋の大部屋左右にある2段ベッドは4人毎に区切られていて、布団4枚敷くといっぱい。今はどの山小屋もインナーシートか寝袋持参を義務づけている。談話室でビールを飲みながら（僕は北海道牛乳）団らん。読書家のN君、僕の昔の本を持参して質問してくるのには恐れ入った。

7月27日 朝方まで降っていた雨は止んでいる。薬師岳は雲の中。深い緑の黒部溪谷の向こうに濃緑色の巨大な大地が見える。雲ノ平だ。どこからも人を寄せ付そうにない急峻な稜線。もののけ姫の深い森と静寂。あの台地には古代からの神が宿っているに違いない。「北アルプス最後の秘境」と言われる由縁だ。黒部五郎方面に登っていくパーティーが幾つか見える。雲ノ平は、西の立山―槍縦走路や東の後立山―槍縦走路から外れている。どこから入るにも、一旦黒部溪谷に降りて登り直さなければならない。黒部溪谷に下るパーティーは少ない。ぬれた急な径を下り始めると、ニッコウキスゲの黄色い群落が目を楽しませてくれる。

今日のリーダーはN君。10分ごとに立って休む。20分ごとに小休止。あと5秒で出発とつれない。黒部川までの下り600m。その間大きな徒渉地点が3箇所と地図にある。雨が降り出して慌てて雨具を着ける。最初の大きな徒渉地点には、鉄の板橋が架かっていた。濁流がゴウゴウと流れている。数えたら、大小10箇所以上も徒渉地点があった。夏場は、それらすべてに橋が渡されているので安心だ。でも、平均台の苦手な人、高所恐怖症で目がクラクラする人はだめ。丸太板一枚のもあるし、どの橋も手すりや掴むロープは無いのだから。雨の中、下るのがいやになった頃、黒部溪谷側の薬師沢小屋に到着。



ニッコウキスゲの群落

狭い入り口は雨宿り客でいっぱいだ。山小屋の娘さんが親切に「上がって休んで下さい」とすすめてくれる。今日のリーダーが、イケメンで良かった。コロナ援助寄付を千円させてもらって、食堂で持参のランチをとる。お茶までいただいた。温かくておいしかった。1時間休憩のつもりでくつろいでいたら、Nリーダーの「出発！」のつれない号令。

でもね、試練はこれからです。濁流渦巻く黒部川に架けてある鉄の釣り橋を渡り、鉄の階段を這って降る。これから雲ノ平まで858mの登り。聞きしに勝る悪路の急登。雨は容赦なく降る。円いゴロゴロした大きな石や岩を掴みながら這って登る。まるで沢登りだ。試練はこれだけではないのです。薄暗い澤の中にブト（ぶゆ）がわんさと待ち受けて、目の中、鼻の中、耳の中に入り込む。払っても払っても敵数にはいかんせん。T君など半ズボンで脛丸出しなので、攻撃されっぱなし。ザックをドカッと投げ出して休んでいても、防戦一方。登っても登っても巨石と岩の連続。さすがのNリーダーも10分、20分休みの規則を投げ出した。そうそう、このNリーダーのすごいところは、雲ノ平から烏帽子を降りるまで水場がないので、皆の非常時用に4リットルの水を太郎平小屋から担いできていること。我々はその恩恵にあずかるのだけど。今は、水なんかいない。ずぶ濡れでやけっぱち。しかし、いつ果てるとも思えない登りもその内果てるのです。人間の足ってたいしたものですね。一步一步努力すれば、目的に近づくのです。勉強もそうだそうです。早く知っていればナ。

木道が出てきたら登りが緩やかに。雨も止み霧が立ちこめている。色とりどりの花にも目を向ける余裕がでてくる。何の花かって？かつて仲間と歩いたツール・ド・モンブランのガイド君言っていたね「日本人はどうしていちいち花の名前聞くの？どうせすぐ忘れるのに。どれも、これも花、花」。この名言大好き。アラスカ庭園で休憩。やって来ました雲ノ平。ここは、その西の端。回りはシラビソの森。濃い緑の森の中、雷鳴にせかされて足取り重く木道を歩くこと一時間半、突然右上に雲ノ平山荘が見えた。16時、着いた着いた。

山荘のお姉さん、親切に「乾燥室で、濡れたものを渴かしてきて下さい」と言って、一人に2本ずつハンガーを渡してくれる。やっぱりイケメンリーダーの効果かな。それとも、濡れそぼって憔悴した老人への同情か。地下の乾燥室は着物のジャングル。掻き分け掻き分け奥に進み、隙間に濡れたザックカバーや雨具をつるす。後で靴下やスパッツも架けにくる。T君自慢のふんどしは乾かさないうようにと皆で助言。タオルと間違えられると困るから。寝場所は去年泊まった屋根裏の下の階の大部屋。生き返ったここち。今日は、雨なので臨時の登山客を受け入れて混雑しているとのこと。この山荘は、大木の梁を組み合わせた釘を使わない日本建築。梁がむき出しで木のぬくもりが感じられ居心地が良い。夕食は名物の石狩鍋。3人はビールで乾杯。僕はお茶で代用。M君もN君も下界の明かりが全く届かない深黒の台地を包む満天の星と銀河を観るのを楽しみにしていたが、ガスっていてお預け。家内は昨年、夜中に起き



雲ノ平から望む笠ヶ岳

て観て感動したと。僕は疲れて眠っていた。

7月28日 朝5時、食堂の窓から見える景色に目を見張る。青空の下、緑の絨毯に点在する池嶋ちとうの遙か向こうに笠ヶ岳が優美な姿を浮かべ、黒部五郎、三俣蓮華、鷲羽岳が雲ノ平を取り囲み、北鎌尾根、大天井岳おてんしょう一槍ヶ岳の表銀座が遠くに外壁を巡らしている。反対側の窓からは、水晶岳こと黒岳の双耳峰が間近に見える。薬師岳の山頂はガスに覆われて見えない。5時45分出発。今日のリーダーは、T君。

木道の回りは高山植物の花盛り、転々と散在している地嶋が織りなす造形美は、「天空の樂園」と言われる由縁だ。花に見とれて僕は遅れ気味。キャンプ場別れから登りになり、祖父岳分岐じじだけに到着。まっすぐ行けば、日本庭園を経て黒部源流、三俣蓮華山荘みつまたれんげに至る去年のコース。我々は、祖父岳を越えていく。登り始めると視界が広がり、見事なカールを抱いた黒部五郎岳が見えてくる。登りながら何度も何度も振り返って雲ノ平とその向こうの景色を目に焼き付ける。この時期、雪渓が多く残っていて、これぞ北アルプスといった夏山。もちろん、周辺は名のある高山植物の花、花。

祖父岳頂上(2825m)から、電波が通じたので家内に無事を伝える。「昼頃、雨雲が通り過ぎるけど今日は快晴よ」と教えてくれる。ここで出会った、ご主人68才のご夫婦と娘さん、娘さんがワンゲルだったので心強いとか。彼女、残念ながら広大の後輩になり損ねた由。我々が、80才パーティーと知って、ご主人は今回が最後の山旅かと思っていたが、「未だ10年は楽しめるね」と奥さんから激励されていた。



コバイケイソウと三俣蓮華岳

華山荘の赤屋根が見える。左手向かいには、水晶岳が聳えて、我々の到着を待っている。しかし、この広々とした稜線の登り結構しんどい。途中のハイマツに座って、今降りてきた祖父岳を正面に左右の景色を見ながら昼食。僕は、持参のビスケット、ソーセージ、チーズにリンゴ1っこ。ハイマツに寝転んで昼寝をしたいナ。

水晶小屋の側で、N君から水を分けてもらおう。日本100名山の水晶岳(2986m)、ここまで来て登らない手は無い。N君なら空身で往復1時間、後から追いかけてくれば良い。でも誰も薦めなかった。N君も、後でこの決断に感謝することになる。山小屋の周りには、色とりどりの高山植物が今を盛りと咲き競っている。M君、ミヤマオダマキに見とれて仰向けに転倒。1m右は断崖絶壁。山小屋のテラスから思わず悲鳴がもれる。ここから、地獄の障害物競走が真砂岳まで続く。痩せ尾根の下を径は巻いているが、やっと歩けるぐらいの岩の出っ張った狭いゴロゴロ径。次々に切り立った岩が現われる。左足下は、数百メートル崩れた断崖絶壁。

東澤乗り越しには、小池がありほっとする。途中で出会った中年の女性二人ずれ、「次々に障害物の連続ですよ」と、やっと終わって安堵した感じ。「いやー、ここから水晶までも障害物競走で

すよ」と激励。ここから、真砂分岐までは、今までとは違った大きな岩の連続。印の付いた岩を見落とさないように足場の岩を選ぶ。緊張の連続。ポールが邪魔になったり役だったりと忙しいこときりが無い。ワングル諸君なら一度は、裏銀縦走をした経験があるだろう。「そんなに大層なこと無かったよ」と思っているだろう。僕も10年前の記憶ではそんなものだ。しかし、このコース絶対に老人向きでは無い。80才お断り。「身軽で脚力のある若者向きコース」と、シルバー4人の一致した意見。と、まーなんやかんやとこの岩場を罵りながらも足を運ぶうち、真砂分岐が見えてきた。



黒部五郎岳（奥）のカール、斜面の緑はハイマツ

この場で座り込んだTリーダ、「後でゆっくり行く。場合によってはビバークして明日までには小屋に行くよ」。学生時代に単独行で何度か経験のあるT君なら本気でビバークしかねない。『老人パーティーの無謀登山：広大ワングルOB、82才の仲間を置き去り』の新聞見出しが目に浮かぶ。そこで、M君と僕の2人で先に山小屋に行き、N君にT君を任せ、後から遅れて2人が来る旨伝えることにした。そのM君、昨日の疲れでビールか水が当たったのか、お腹の調子が悪く、ランチもパス。でも気力で頑張っている。野口五郎岳の巻き道で風が出てきて急に寒くなる。『小屋まで700m』の標識のところで雨が降り出したので、雨具を着ける。これは正解。もう少しと思って我慢していれば、低体温症になっていたかも。5時過ぎ野口五郎小屋に到着。山小屋の主人が心配して戸口で待っていてくれた。

乾燥室で雨具やザックカバー等乾かし、二人部屋に落ち着く。休んでいると「お仲間、もうすぐ着きますよ」と主人が教えてくれる。T君とN君が美しい夕焼けをバックに小屋をめざして降りてきている。6時半無事到着。M君は夕食抜き。残り3人も食欲無し。目玉焼き付カレーライスを残してしまった。N君、大好きなビールをパス。今日は、結局11～12時間半かかってしまった。明日は、トータルで431mの登りと2054mの下りが待っている。一晩で体力回復できるのかな。

7月29日 5時前、茜に染まる遠くの空。富士山がくっきり浮かんでいる。きっと昨夜の星と天ノ川はきれいだったはず。でも皆、横になったとたん朝4時まで爆睡。

今日も快晴。小屋の裏手より早速の登り。今日のリーダは、僕。先が長いので急ごう。と言っても息切れしない程度にゆっくり歩む。広い砂地の尾根が続く。斜面にピンクの小さなコマクサの群落。このあたりは、コマクサの宝庫だ。左手に、水晶岳から続く赤牛岳の大きな尾根。その向こうに、今日のはっきりと薬師岳の頂上が青空と一線を画して鎮座して見える。風をよけて朝日に暖まりながら朝食代わりのおにぎりを食べる。1個はお昼用に残しておいた。表銀座縦走路の大天井尾根が聳えている。歩いていると、前方遠くに黒部湖が、その正面には立山とその陰に剣岳が望まれる。左手の長大な尾根筋は、立山一五色ヶ原から薬師岳までの峰峰。五色ヶ原の雪渓はここから観ても大きく広い。N君は2年次の合宿であの尾根を縦走したという。しばらく行くと、後方に槍が見えてきた。

日が昇るにつれ、身体全体が爽やかな風と静寂に包まれる。コマクサもハイマツも朝の光と朝露を享受している。烏帽子小屋を今朝出発したパーティー何組かに合う。皆、三俣蓮華山荘までだそうだ。若いから、昨日悪戦苦闘した岩場も、ホイホイだろう。三ヶ岳の巻き道を過ぎて、快適な尾根筋を歩いていたとき、困ったことにもよおしてきた。前後どこにも人影は無い。足場の良いハイマツの陰で雉子打ちを終えたとき、二人ずれのパーティーが通り過ぎるでは無いか。何故か、この尾根のハイマツは背丈が低くて、頭も隠せない。まーいいか。ホモ・サピエンスはこの間まで自然とともにあったのだ。「アハハハ（名誉教授も顔色なしですね）アハハハ」と、N君喜ぶことしきり。加藤則芳著「メインの森をめざして：アパラチアン・トレイル3500キロを歩く」によれば、トレイル中はスコップを持参して、穴を掘って埋めるのが原則だそうだ。熊や野獣に知られないためとか。それ知ってたから、僕だって手で砂を掘ってしっかり埋めておいた。54才の加藤氏はバックパックで、ジョージア州のスプリングガーマウンテンからマウントカナディアンまでの3500 KMを完歩している。彼はジョン・ミュアやソローを愛するナチュラルリスト。

10時前、烏帽子小屋に到着。お花畑を前にして昼食。M君、何も食べないで寝転んで休んでいる。今から、日本3大急登の1200mを降るけど、T君は膝が持つかどうか心配している。リーダーの僕は、5時までに着くかどうか心配。高瀬ダム管理下のゲートが閉まってしまうから。N君、『下り3時間半』の標識見て「リーダー、挑戦しますか?」。N君の冗談もここまで。ここから最後の試練が始まる。

標高差100m毎に番号が振ってある。山小屋裏の尾根が0，それから降るに従って数字が増えていく。登る人は逆に数字が減るのがうれしいというわけ。この下りは全て樹林に覆われている。時たま木々の切れ目からなだれ落ちている山が見える。花は？ほとんど目に入りません。それどころではないのです、少しでも径から目を離すと木の根っこや石に乗って滑り落ちます。一步一步慎重に降ります。朝早くダムを出発したパーティーが次々に登って来る。登ってくる方は、皆元気。反対に降る方は、よろよろ。手がかりの無いところには、梯子がかかっている。2本ポールのM君と僕は、だいたいポールに頼って前向きで降りるが、ポールは老人くさいと拒否しているN君は、仕方ないので岩や枝や草を掴んで後ろ向きで降りていく。この下り行程の3分の1ぐらいは後ろ向きに歩いていたのでは。T君？1本ポールで、一番慎重に膝をかばいながら遅れて降りてる。時折、右遙か下に、白みを帯びた美しい空色の高瀬ダム湖が見える。降ること2時間、やっと三角点（4番）に着いた。休んでいた5人組の中年パーティー、我々が80才パーティーで、雲ノ平を経てきたことを知ると、愕き感心することしきり。皆から、「勇気をもらいました」と今回2回目の感謝をされた。遅くとも、5時にはダム（12番）まで降りれるめどが付いた。

後り800メートルの下り。どこをどうやって降りたか覚えていない。ただ無心に降るのみ。ここで、足を滑らしては大変。とにかく慎重に一步一步降るのみ。その内ダム湖も近づいてくる。午後4時、濁沢の登山口に無事到着。膝筋肉を痛めたT君も足を引きずりながら降りてきた。2日間食事を摂らずただただ気力で歩いてきたM君、一番元気なはずのN君も憔悴しきっている。シルバー・4・ワンダラー、150%以上の体力を出し尽くし、ハイタッチ（涙）。**やったね（笑顔）。**

ダムに架かる不動沢の長い吊り橋を渡り、長いトンネルを抜けダムの突堤にたどり着いた。今日の宿はダム下流の葛温泉の高瀬館。惜しげも無く流れ込む源泉の露天風呂に浸かり、4日間の疲れを癒やす。ああ極楽。冷たいビールで乾杯。

皆さん、一度雲ノ平へ行きたいなら新穂高温泉からのルートがお奨め。急にメンバーが足りなくなっても、決して僕を誘わないで下さい。僕は、忘れっぽいのです。1ヶ月もすれば、辛かったことなどきっぱり忘れ、斜面いっぱい咲くニッコウキスゲやコバイケイソウの群落を思い起こし、雪渓を抱いた雄大な尾根、チングルマやシナノキンバイ、ハクサンフウロ、もろもろの花*花、砂利尾根に心地よく揺れる可憐なコマクサ、前後左右見渡す限り幾重にも連なった緑青の峰峰、あの青空の下、ハイマツに寝転んで雲の流れをぼんやり眺めながら、山の静寂に身を任している姿しか思い浮かべないのです。ましてや自分の年さえ忘れてしまうのです。

この旅には、まだおまけがあります。帰りの新幹線で、喉の痛みを感じました。家内にメールして、PCR検査受付を調べてもらったが、土曜日は午後3時締め切りの上翌日も既に予約で一杯とのこと。帰宅後、熱が出てきたので夜間診療当番の本永病院へ。車に乗ったまま手続き。PCR検査は、検体を採取するが、結果は火曜日とのこと。PCR装置、僕の研究室にも数台あった。二重鎖DNAを熱をかけ1本鎖に解いて、酵素を加えてDNA複製し、熱したり冷ましたりを繰り返してDNA断片を増幅する。酵素は熱で不活性になるので、耐熱性酵素を使う。コロナウイルスはRNAウイルスなので逆転写酵素によりDNAに変換して装置にかける。PCRというのは分子生物学の粋を集めた装置なんです。そんな講釈いらぬ結果はどうだったかとおっしゃるけど、今なら数時間で結果の分かるPCR装置も開発されている。地方行政は後れていることを言いたい訳。そこで、抗原検査を頼む。半時間後、コロナウイルスの抗原検査で陽性判定。すぐに、仲間3人に電話。結局1人は無症状で3人が喉の痛みと発熱などで陽性。10日間の自宅監禁。

殺菌学やウイルス学も教えてた微生物専門家として、なんとも面目ない話。どこでウイルスが感染するか知っててマスクも消毒も神経質にしていたはず。でもね、電車や新幹線の座席の手すり触る度に、殺菌しますか。山小屋ではアルコール消毒も有りマスク付けてたけど、食事中はマスク外します。久しぶりの仲間、ビール飲みながら黙食できますか。シート持参でも、誰が触ったか分からない布団のアルコール消毒できますか。等など、お手上げです。やっぱり、不要不急の旅などしないで巣ごもりが一番。自業自得です。どんな批判でも受けませんが、80.8才今回しか無かったのです。大変だったけど、やっぱり行って良かった。

2022年8月4日

完